

特集 ソバ 産地の取組み

島根県奥出雲町における在来品種「横田小そば」を活用した
産地振興について島根県東部農林振興センター雲南事務所
農業普及部 仁多地域振興グループ課長 三木 伸次

1. はじめに

島根県仁多郡奥出雲町は、島根県東南端の山間部に位置し、中国山地の嶺を隔てて広島県と鳥取県に接している。地域の歴史は古く、古事記や日本書紀にも登場し、八岐大蛇（ヤマタノオロチ）退治や素戔鳴尊（スサノオノミコト）が降臨したと伝えられる出雲神話発祥の地として名高い。良質の砂鉄が産出されることから、古くから和鋼の生産が盛んで、現在でも町内の日刀保たたらでは、世界で唯一「たたら製鉄（※後述）」による玉鋼生産の操業が行われている。

この、歴史と文化の薫り高い奥出雲町の地に、晩秋ともなれば新たにもう一つの香りが加わる。そう、町内で生産された新そばの香りである。

近年、奥出雲町では、この地域に古くから残っていた在来種「横田小そば」を核として、生産者、町内蕎麦店、行政、農協等が一体となってソバの産地振興に取り組んできた。その概要を紹介したい。

2. 地域の概要とソバ栽培の歴史

平成17年3月に、旧仁多町と旧横田町が合併し、仁多郡奥出雲町が誕生した。八岐大蛇（やまたのおろち）伝説の舞台となった斐伊川の最上流部に位置し、耕地は標高約170m～800mに分布している。夏も比較的冷涼で昼夜の温度差が大きく、山懐から流れ出るミネラル豊富で清らかな水にも恵まれて、美味しい農産物が育まれている。特に「仁多米」は良質米として全国的に有名である。

当地のソバ栽培の歴史は古く、この地で盛んに行われた「たたら製鉄」の歴史と関係が深いとされている。奥出雲地方は良質の砂鉄産地であり、「たたら製鉄」と呼ばれる製鉄法が6世紀頃には



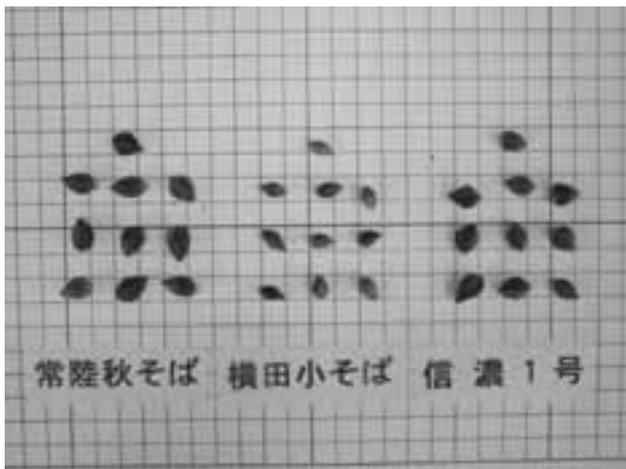
出雲そばの代表的な食べ方「割子そば」

行われていたと考えられている。「たたら製鉄」では、良質の砂鉄と、木炭原料となる大量の山林資源を必要とする。砂鉄の採取にあたっては、山を切り崩し、大量の土砂を川に流して砂鉄を選別するという「鉄穴（かんな）流し」という方法が行われた。この切り開かれた山の斜面や、木炭を作るために伐採された跡地などに火を放って焼き畑が行われ、ソバが栽培されたと言われている。

昼夜の気温較差が大きく風味豊かに育ったこの地域のソバは古くから珍重された。江戸時代には、松江藩主が江戸幕府に納める献上ソバとして、今の奥出雲町小八川地区のソバが使われていたと言われている。

3. 「横田小そば」の歴史

現在地元で「横田小そば」と呼んでいるものは、当地域で古くから栽培されてきた在来種に由来している。かつて在来種は、香り、甘み、粘りが強く、美味しいソバとして各家庭で少しずつ栽培されてきた。しかし、小粒であり収量が低いこと、収穫時期が遅く、台風、降霜、年によっては積雪



「横田小そば」と他品種の比較

などの気象災害を受けやすいこと等の短所がある。そのため、水田転作が始まりソバの作付けが増えるとともに、収量の多い信濃1号、常陸秋そばなど新品种の栽培が増加し、在来種はその栽培面積を減らすと共に、自家用に細々と作られる中で交雑が進み、徐々に姿を消していった。

4. ソバ振興の取り組みと、「横田小そば」の位置づけ

一方では、過疎化・高齢化が進む中で、町の資源である農地の荒廃が進んでいった。旧横田町には、かつて国営農地開発事業で造成された290haの農地があるが、ここでも農地の条件不良や担い手の高齢化、農産物価格の低迷等により、遊休化が進む現状にあった。そこで、町では、みんなで知恵を出し合って何とかこれを防ごうと、平成15年に、農家、商工業者、NPO法人、女性グループ、消費者、教育関係者、学識者等からなるワークショップを1年かけて実施、開発農地の利用ビジョンをとりまとめた。

その中で提案されたのが、ソバをテーマにした地域興しである。省力的でまとまった面積で栽培できる品目、従来から地域に根ざした品目として、ソバに着目し、開発農地をはじめとした地域の主要品目として育成することとした。特に、「どうせするのなら、ここにしかないご当地のソバで地域興しをしよう。」との考えから、風味に定評のある在来種を「横田小そば」と命名し、その復活プロジェクトが始まった。

5. ソバ振興の取り組み概要

ソバ全体の振興対策として取り組んでいる主な具体的方策は次の通りである。

- (1) 「横田小そば」の復活と普及（後述）
- (2) ソバの生産拡大

①栽培者組織の結成

計画的な生産・流通等を推進するため、結成に向けて検討中である。

②利用権設定による農地の流動化、担い手への集積

遊休農地を再生するとともに、集落営農組織や農業への参入企業等の担い手に集積を進めている。

③作業の受委託等、労働力補完の体制作り

時期が集中する収穫作業において、町農業公社や集落営農組織がコンバイン収穫の作業を受託。町はその作業料金の半額助成を実施（22年度まで）。

④栽培技術指導

農業普及部等による栽培指導の実施。

- (3) 町内産ソバの利用促進と価格対策

①町内蕎麦店のネットワーク作り（町内産ソバの供給と利用の体制整備）

②価格対策

農協は出荷されたソバの販売対応に努力。特に「横田小そば」については、蕎麦店等、町内実需者の理解のもと、農家からの買入価格を他品種より高く設定している。

- (4) 広報・交流活動の推進等



町農業公社によるコンバイン収穫の受託作業



集落の取り組みによるソバのオーナー農園

- ①新そば祭りの開催
- ②そばオーナー農園等の開設（集落での取り組み）

現在、2集落が町内外からオーナーを募集し、ソバの栽培～収穫～ソバ打ちの体験や収穫祭等も実施。県外からの応募も多い。

以上の中から、本稿のテーマである、在来品種「横田小そば」を活用した産地振興について以下に記述する。

6. 「横田小そば」の復活と普及

(1) 種子の安定供給（原種の確保と隔離栽培による種子増殖圃場の設置）

既に姿を消しつつあった在来種の種子確保が課題であったが、県の農業技術センターに相談すると昭和50年代に収集された旧横田町の在来種の種子が保存されており、それを一部譲り受けることが出来た。これが平成15年のこと。それを種子として農家に配れるようにと翌年から採種圃を設け、順次種子量を増やし、3年がかりの末、18年にやっと300kgの種子を収穫、19年に初めて農家に種子配布を行うに至った。

種子配布に当たっては、交雑を避けるため、近隣に他品種の栽培が無い農地に限定したり、これを機に集落ぐるみで「横田小そば」に品種統一したりといった苦労があった。同時に、いつでも種子を再配布できるよう、場所を厳選して町が開発農地に採種圃を設置し、栽培～調整・選別に至る管理は町農業公社が行うという採取事業の取り組

みを現在まで継続している。採種の危険分散を図るため、従来の1カ所に加え、22年には遊休化していた農地を再整備し、2カ所での採種に取り組んだ。

ソバは虫媒花であり、訪花昆虫の重要性は言うまでもなく、いわばソバの産地であるということは、周辺環境に恵まれていることの証でもある。当地域は幸いに豊かな山野の自然に囲まれているが、それでも年により、また、天候により昆虫の訪花活動は大きく影響される。そこで、結実安定のためにミツバチを放飼する取り組みも増えている。特に「横田小そば」の採種圃においては、巣箱を設置し、結実安定を図っている。一方残念ながら、近年は養蜂農家も減少傾向にあり、本格的にこの取り組みが行える状況にはない。ソバに限らず、耕種部門と養蜂農家との連携はますます重要性を増すものと思われ、今後の課題である。



他品種と隔離して栽培される「横田小そば」の採種圃



結実安定のために採種圃に設置した巣箱

(2) 横田小そばの作付け推進

収量が低いこと、収穫時期が遅いこと等から、「横田小そば」の栽培希望者は必ずしも多くなかった。そこで、地道に説明しながら推進する一方、種子の安定供給や、収穫物は農協が他品種より高値で生産者から買い入れ、販売することで栽培農家の支援を行い、現在は町内のソバ全体80haのうち、「横田小そば」は9 haまで復活するに至った。

7. 取り組みの成果

これらの努力が実を結び、「横田小そば」は多数のメディアに取り上げられるようになり、更には奥出雲町のソバ全体が再び注目されるようになった。遊休化が進んでいた開発農地においても、ソバの作付けは15年の10haに対し、22年には49haまで増加している。

ソバの生産だけでなく、食文化を発展させるため、教育部門でも、町内小学校の総合学習でソバづくりが採り入れられるようになった。「横田小

そば」は、地域の歴史や食文化などの学習の一翼も担うようになったのである。

8. おわりに

平成23年度からは、畑作においても戸別所得補償制度がスタートする。ソバの作付け推進にとっては追い風になると思われるが、それだけに一層、安定生産と高い品質の確保が求められるようになると考えられ、これまでの取り組みを強化しなければならない。

今、地元のソバを供する奥出雲町の蕎麦店には、休日ともなれば長い行列が出来る。「横田小そば」が美味しいことを知って、ここに通う常連も多い。

奥出雲町では、新そばの季節が始まる11月には、毎年「新そば祭り」が催され、町内の蕎麦店、そば打ちグループ等が出店し、大いに賑わう。この地域にとって、ソバは単なる換金作物ではなく、暮らしや文化そのものである。是非、この地に訪れ、美味しいソバと、文化・歴史の薫りを満喫していただきたい。



「横田小そば」の種まきをする小学生



来訪者で賑わう11月の「新そば祭り」